

# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

( 3 年計画の 3 年目)

## 1. 研究課題

古典解釈の東アジア的展開—宗教文献を中心課題として

The development of the East Asian exegetical tradition, with special reference to religious texts

## 2. 研究代表者氏名

藤井淳

Fujii Jun

## 3. 研究期間

2013 年 04 月 - 2016 年 03 月 (3 年度目)

## 4. 研究目的

本研究は、中国を中心とする漢字文化圏の宗教文献と関連の諸事象に関する古典解釈の東アジア的展開の諸相を、他の諸地域における展開と対比的に検討しながら研究するものである。東アジアの古典が成立後、長い歴史の中でいかに継承、解釈され、変容を遂げたかを深く知るには、質量ともに豊富で且つ研究蓄積のある仏教の歴史を検討するのが有効である。例えば中世中国の仏教では、ある語句の意味を注釈する際、中国伝統の訓詁学を一部基にしながら、同音の漢字や意味の共通する漢字に置き換えて語義を展開することによってしばしば自らの理解に引きつけた思想を展開した。長い間に同一の語や概念が全く別様に変異した場合もある。従来の近代的な研究ではこうした解釈は時に誤解・曲解として軽んじられもしたが、実際は東アジア的思考になじむものとして今も大きな影響をもつ。本研究は、漢字文化圏の古典解釈の展開を通時的に探求すると共に、漢字を思考や表現の基盤とする東アジア文化圏の特性をも広く探究する。

This project explores the historical development of East Asian exegetical tradition(s) by carefully comparing translations and interpretations of religious texts produced in the East Asian cultural sphere with those produced in other regions. In exploring the transmission, interpretation, and transformation of the East Asian classics over time, the history of Buddhism provides a particularly effective avenue of inquiry, because Buddhist textual materials are such a rich resource, both in terms of quality and quantity. They have, as a result, inspired a long history of productive research. In the case of medieval China, for example, when exegetes commented on the meanings of terms, they

often based their interpretations on the orthodox Chinese exegetical tradition, which sometimes led to the replacement of specific characters with either homophonous or (near-)synonymous ones. This led to an evolution in the interpretation of the original terms, whose connotations and denotations were transformed by these borrowings and substitutions. This research project aims to offer both a diachronic investigation of the exegetical approaches taken to the classics in the East Asian cultural sphere, and, an exploration of the idiosyncratic modes of thought and expression that have arisen in East Asian cultures due to their mode of literary expression: namely, Chinese characters.

#### 5. 本年度の研究実施状況

今年度は研究班を8回開催した。参加者は毎回25～35名ほどであった。分野は中国および日本の仏教の思想・歴史・考古・美術のほか、道教思想や中国土着思想を扱った。前2年と同様、今年も毎回、一人の報告者と二人のコメンテーターを選定して行われた。参加者は京都市内はもちろん、北は仙台から、東京、大阪、神戸を中心に、南は熊本市に至る各地の班員が集った。各戒の具体的なテーマと内容全体については、「6.研究成果の概要」および「7.本年度の研究実施内容」に記す通りである。最終回の「総括」では、班長自らが3年を振り返り、各内容を整理して幾つかの重要な視点を設定して、反省点と今後の課題も含めて、研究班の総まとめをした。

#### 7. 本年度の研究実施内容

- 2015-04-28
  - 夏元鼎『黄帝陰符經講義』の思想と道・佛二教 発表者 山田隆
  - コメンテーター 横手裕
  - コメンテーター 松森秀幸
- 2015-05-23
  - 親鸞の仏教理解 発表者 末木文美士
  - コメンテーター 熊谷誠慈
  - コメンテーター 藤井淳
- 2015-06-20
  - 近代における東アジアの「宗教」概念 発表者 藤井淳
  - コメンテーター 村田みお
  - コメンテーター 中西竜也
- 2015-07-18
  - 東アジアにおける本生図 発表者 田中健一
  - コメンテーター 向井佑介
  - コメンテーター 加納和雄

- 2015-09-12
  - 二つの布袋像：その伝記を中心にして 発表者 陳継東
  - コメンテーター 金文京
  - コメンテーター 宮崎展昌
- 2015-10-10
  - 北魏平城期の雲岡石窟 発表者 岡村秀典
  - コメンテーター 齋藤明
  - コメンテーター 藤井淳
- 2015-12-12
  - 南宋制作「涅槃（変相）図」とその儀礼の復元的考察 発表者 西谷功
  - コメンテーター 齋藤智寛
  - コメンテーター 岡田英作
- 2016-02-20
  - 研究班の総括 発表者 藤井淳

#### 8. 共同研究会に関連した公表実績

公開講座「仏教では「心」をどうとらえてきたか——漱石「こころ」発表百年の今、古典に描かれた「心」を再考する」京都大学人文科学研究所「人文研アカデミー」、2014年11月8日 研究班ホームページ

10. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数	参加人数				延べ人数			
		総計	外国人	大学院生	若手研究者	総計	外国人	大学院生	若手研究者
所内		9 (8)	22	8		88 (8)	22	8	
学内(法人内)		7 (8)	10	48	24	56 (8)	10	48	24
国立大学		6				46			
公立大学		3				24			
私立大学		10 (20)	3	24	24	65 (24)	3	24	24
大学共同利用機関法人									
独立行政法人等公的研究機関		2				16			
民間機関		2			16	16			16
外国機関									
その他		1				8			
計		40 (36)	35	80	64	319 (40)	35	80	64

※ ( ) 内には、女性数を記載

11. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

参加研究者がファーストオーサーであるものを対象

総論文数	31 (26)
国際学術誌に掲載された論文数	6 (5)

※ ( ) 内には、拠点外の研究者による成果(内数)を記載

インパクトファクターを用いることが適当ではない分野等の場合

理由	人文学における最新の写本や研究に基づく文献学的研究		
掲載雑誌	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名
東アジア仏教研究	2	杏雨書屋所蔵『釈肇序抄義』翻刻	<u>菅野博史</u>
印度学仏教学研究	3	Reconsidering the Meaning of Emptiness in the Vimalakirtinirudesasutra	<u>斎藤明</u>
A Distant Mirror (ハンプルク大学出版会)	1	Chinese Translation of pratyaksa	船山徹
東亜仏教研究 (北京、宗教文化出版社)	2	所謂"見仏性"-唐代禅宗的实践	<u>齋藤智寛</u>
Brill's Encyclopedia of Buddhism, Pt. 1 (ブリル出版社, オランダ)	1	Chinese Buddhist Apocrypha	船山徹

※拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す

15. 研究成果公表計画および今後の展開等

研究報告としてこれまで毎回の研究班内容をウェブで公開してきた。冊子体による論文集の刊行を班長が行っている。